

# 桃咲く里

佐久市立平根小学校  
学校だより3月号①  
令和5年3月14日

文責：教頭 原



## 東日本大震災から12年 震災の授業をしました

2011年3月11日（金）14：46、宮城県牡鹿半島の東南東沖を震源とする、発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震が発生し、それに起因する大津波や原子力発電所の事故なども重なり、未曾有の大災害となりました。今年度の卒業生が生まれた年度の出来事でした。

3月10日（金）に、福島県出身で震災時に福島県で教師をしていて、実際に被災した経験を持つ、社内慶太郎先生（本校、4年1組担任）に、全校児童に向けて震災についての授業をしていただきました。概要は次の通りです。詳しい内容につきましては、お子さんに聞いていただくとともに、取材に訪れていた信濃毎日新聞社の記事（裏面に掲載）もご覧ください。

私、4年1組の担任、社内慶太郎は、2011年3月11日（金）、福島県相馬市内の小学校で2年生の担任をしておりました。児童を下校させ、放課後の職員会議のために職員室に集まっていました。もうすぐ会議が始まるという午後2時46分、カタカタと地震が起きました。数日前にも複数に渡り震度3～4程度の地震が起きていたため、またそのぐらいの地震かと思っていた矢先、強い縦揺れに襲われました。他の先生方は一瞬のうちに机の下に潜りましたが、私だけ逃げ遅れました。自分の後ろに金属製の棚があったため、無意識のうちにその棚を押さえていました。大きな地震の時はそんなことをしても止めることができないと誰しもが分かっていることですが、咄嗟の時には全くと言っていいほど動けないことを改めて痛感させられました。そんなことをしていると、揺れがますます強くなっていき、耐えきれなくなり、廊下に飛ばされました。職員室側の壁に背中をつけて揺れに耐えていると、目の前の壁が下からバリバリと上に向かって割れていきました。この瞬間、壁が崩れてくるかもという恐怖が一気に襲ってきました。昇降口からは水槽が落ちて割れる音、校舎全体が軋む音、何かが崩れ落ちる音などが四方から聞こえてきました。約1分30秒後に揺れは収まりましたが、とても長く感じました。学校に残っていた6年生や児童館へ行く児童をどのように帰すかを考えながら、学校や体育館が避難所になると考え体育館を開けると、地震によりたくさんの埃やこの部品か分からないようなコンクリートの破片が散乱していました。水道も止まっていたため、貯水タンクに残っていた水をバケツで汲みトイレ用にしたり、保健室から毛布を運んだりしましたが、余震は30分から1時間おきに起こり、その度に身を縮めて揺れが収まるのを待ちました。合わせて、学校の周りを調べに行った先生方から、「ブロック塀が落ちていて車が通れない。」ことや、「橋が30 cm も浮き上がり通れない。」

「マンホールが突出して渋滞が起きている。」などの様子が伝わってきました。また、点検に来た市役所の方から、地震により校舎半分が壊れて傾いていることが分かり、校舎内に入ることも危険だということになりました。

そうこうするうちに、続々と地域の方が学校の体育館に避難してきました。地震が発生してから約1時間が経っていました。私が勤務していた小学校は、海から少し遠くの高い地域の上に建っていました。後から知ったことですが、この頃には、海沿いに推定20～30 m の津波が押し寄せていました。そんなことは知る由もなかったのです。なぜなら、学校内のテレビは全て落下し壊れ、携帯電話も電波が入らない状態でしたし、ラジオから流れてくる「大津波警報」のイメージは湧かず、当初6 m～10 m の津波だとアナウンスされていました。今考えれば校舎の二階部分ぐらいまでの高さの津波が到達していることを想像することができますが、その当時は全くと言っていいほど警戒していませんでした。



地震の揺れで、  
亀裂が入った学校の柱

地震が発生してから約3時間後に、自宅に電話をかけることができました。携帯は繋がらなかったため、校長室の電話からかけました。幸い家族は全員無事でしたが、後から分かったのは、自宅

まで500 m のところにまで津波が到達していたという事実でした。帰宅するにも道が渋滞していて、思うように進みませんでした。それは、津波が大きな国道等を破壊し、寸断された道路が無数に点在したために渋滞していたのでした。この段階でも、津波がどの程度の被害をもたらしているのかを知ることはできませんでした。

地域の消防団に所属していたため、自宅に帰った後はすぐに詰所に行き、2時間交代で待機となりました。詰所で待機していると、「〇〇という人を見ませんでしたか?」「海側が真っ暗で安否確認ができない。」など、尋ねてくる方がいらっしゃいました。我々も被害の全容が分からないため、何もすることができませんでした。ただひたすら夜が開けてくれるのを待ち、海沿いの地域がどのようになっているのかを把握して、取り残されている人を救助するために待つばかりでした。次の日の朝のニュースで、震災の一部が分かってきましたが、報道には私の住む南相馬市は「壊滅」と出されました。東京に住む大学の友達も、私の安否を心配してくれていましたが、「南相馬市壊滅」のニュースを見て、亡くなったのではないかと思ったそうです。

震災が起きてからの2・3日は、1日がものすごく長く感じられ、「あれ?今何日だっけ?」と思うとまだ2日しか経っていないという状態でした。極限状態で生活をしていると、日常の感覚は全く違うものとなり、見るもの聞くもの、感じること全てが映画の中のフィクションのように感じられました。フィクションであってほしいという、自分の思いだったのかもしれませんが。

程なくして福島第一原子力発電所が水素爆発を起こし、搜索活動もままならないまま茨城県のつくば市へと一時的に避難することになりました。1週間ほど避難生活をしたのち南相馬市の自宅へ戻り、勤務校も新年度をスタートさせるために準備を始め、例年よりも少し遅い4/18日に新1年生の入学式を行いました。私は1年生の担任でした。

社内先生からいただいた資料はここまでですが、実際の授業では、写真や動画、音声を使って、地震発生時の様子や、津波の被害、破壊された町、放射線と向き合いながら学校生活を送る子どもたちなど、実際に被災した人でなくては語れないお話をしてくださいました。

社内先生は、この授業の中で、「家族こそみんな無事だったが、私の剣道の先生や、学校の教え子の身内にも亡くなった人がたくさんいる。知り合いの中には、母親は生き残ったが、子どもや夫、両親などみんな亡くなってしまった人もいるし、子どもだけが残ってしまった家もあった。そんな絶望のどん底にいるときに、ある歌に勇気づけられて、亡くなった人たちのためにも生きようと思った。」と話されました。

私は震災1年後の東北に足を運びましたが、そこで見るもの、聞くもの、胸を締め付けられるようなとても切ない思いになり涙が出ました。ですが、この時間の授業の後には、「前向きに生きなくては!!」という気持ちが湧きました。それは、授業の中で「私はある子に『どうして社内先生はいつも笑顔なの?』と聞かれます。私は、『笑顔』とか『楽しい』とかが、自分からできない辛い経験をしたことがあって、その経験から、笑顔でいたり人に優しく接したりすることの大切さを知ったからです。」という語りから始まり、「皆さん、これからの人生の中で大きな壁にぶつかる事があるかもしれませんが、でも、諦めずに自分でどう乗り越えていったら良いか考えて、強く生きてください。その壁を乗り越えたときに、自分の生きる力が身についていくと思います。」という言葉で終わる、社内先生の実体験からにじみ出てきたメッセージが伝わったものだと感じます。

この授業を聴いていた職員の中には、「今日は帰って、子どもを抱きしめます。生まれたときには、生まれてくれただけで嬉しかったのに、いつの間にか我が子に求めるものが多くなってしまっていたけど、今日は、帰って我が子を抱きしめます。」という方もいました。

この時間は、司会の教務主任の、「皆さんは、これからの日本を『頼むぞっ』て託された命なのかもしれませんね。しっかり生きましょう。」という言葉で授業は終わりました。

「絆」。いつの間にか耳にする機会が少なくなったように思いますが、あらためて、あの当時感じた気持ちをもう一度思い出し、共によりよく、幸せに生ようという願いを確かめたいものです。

